

平成22年度 本高弓ノ木遺跡の発掘調査

2010年11月3日(水) 現地説明会資料

財団法人鳥取県教育文化財団では、鳥取西道路の建設に先立ち、
もとだか ゆみのき
本高弓ノ木遺跡の発掘調査を昨年度から行っています。

現在は、古墳時代前期から弥生時代中期を中心に調査を行っており、
長大な水路や盛土遺構などがみつかりました。

本日は、これらの遺構、遺物のほか、昨年度から調査を行っている木製構造物の調査成果もあわせてご紹介します。



土を盛り上げ 木を組み上げる



盛土遺構

調査地北端で、土を盛りあげてつくった約20×18mの四角い高まりをみつけました。盛土の隅が細長く突き出ており、周囲には幅5～6mの溝が巡っています。また、盛土の上に並べ置かれた石が一部に残っていました。

弥生時代後期に山陰地方でよくみられる四隅突出型墳丘墓と形は似ていますが、埋葬施設はみつかりませんでした。また、墳丘墓の多くが小高い山の上に築かれているのに対して、当遺構は平地に築かれているのも大きな違いであり、その用途については、今後の検討課題です。

盛土の中や周囲の溝から出土した土器から、弥生時代後期後葉(約1800年前)につくられたものと考えています。

木製構造物



【調査担当】
濱田竜彦 中尾智行
下江健太 山梨千晶

土、木、金属。様々な素材で作られ、かつて人々の生活を支えた道具たち。地中に埋もれ、長い年月の間にその大半が朽ちていく中、遺(のこ)った物は何を語るのか。



椅子の脚 (古墳時代前期/4世紀)
腰掛けの脚部。下方には横木を入れるためのあなが開いています。



ひきりうす
火鑽臼 (古墳時代前期/4世紀)

穴の部分で木の棒を回転させ、摩擦熱で火をつけます。



鉄斧の柄 (弥生時代後期/2世紀)
斧の柄。鉄の刃先を差し込んで使います。大きさを加工用の小型の斧と考えられます。



くわ すき
鉄製の鋤もしくは鋤の刃先 (古墳時代前期/4世紀)

刃先だけが鉄の鋤や鋤は、弥生時代から近代まで使われていました。



溝から出土した土器 (弥生時代中期/前2世紀)
ほぼ完全な形に復元できる土器が多く出土しました。溝の近くで建物の跡などはみつかっておらず、居住地は別のところにあったと考えられます。どこから、なぜ、この土器は運ばれたのでしょうか。

本高弓ノ木遺跡年表



遺された物

本高弓ノ木遺跡南端でみつかった木製構造物群

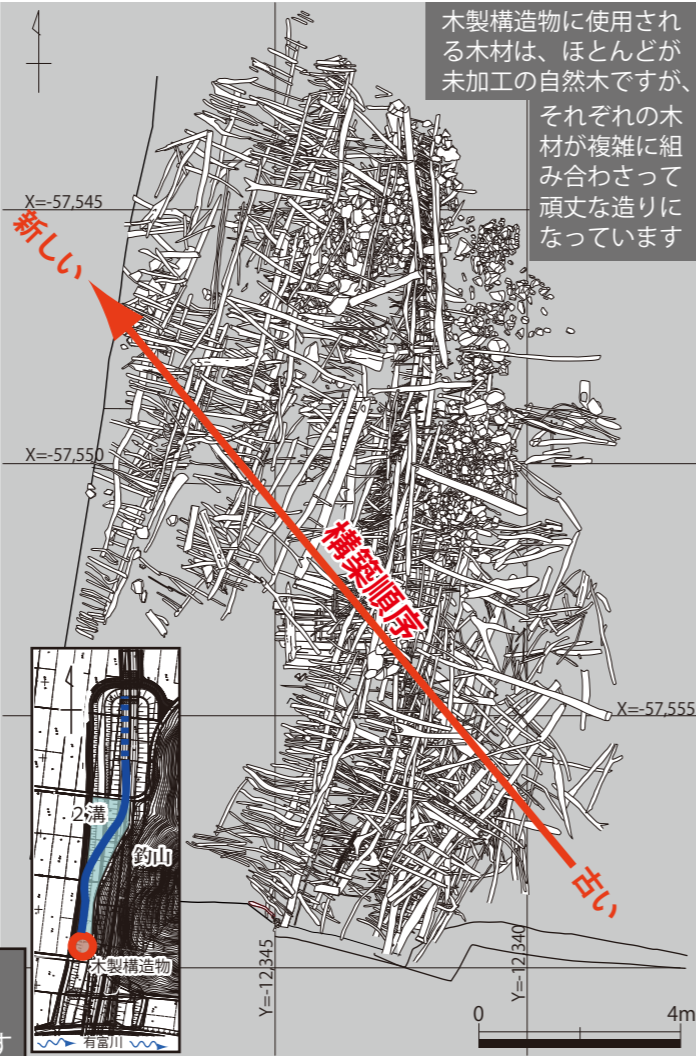
これほど大規模な木製構造物の発掘例は珍しく、古墳時代前期の土木・治水技術を明らかにする貴重な発見です



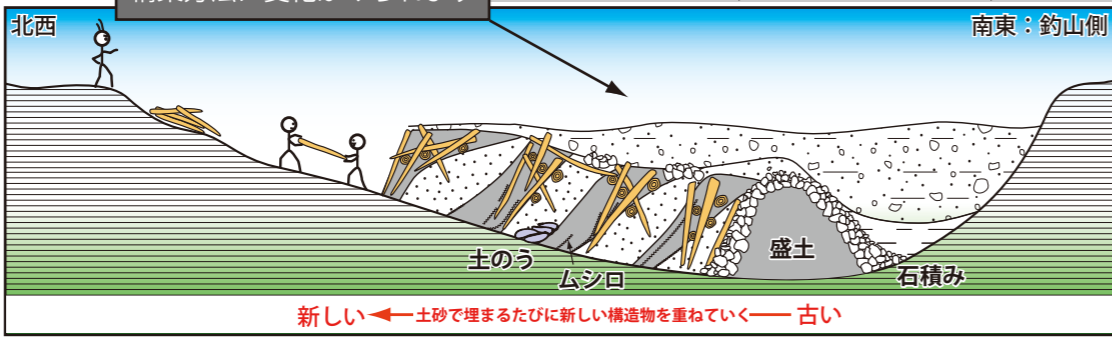
木製構造物を築き始めた初期段階には、石積みの堤防のような構造物がみられます



後の段階の木製構造物ほど石を使う量は減っており、構築方法に変化がみられます



木製構造物に使用される木材は、ほとんどが未加工の自然木ですが、それぞれの木材が複雑に組み合わさって頑丈な造りになっています



大規模な木製構造物群は、一度に築き上げられたものではありません。発掘調査では、南東から北西に向かって新しい構造物が重なっていることが明らかになりました。川が運ぶ土砂などで埋まったり壊れるたびに、組み直したり継ぎ足しをして大きくなっていったのでしょう。

先端の技術

池状の落ち込みの中からは、複雑な木材の組み合わせや、土のうやムシロを使った護岸など、優れた技術が導き出されています。古墳時代、本高の地に立った開発指導者は、最先端の技術と知識を駆使して水を制御し、開発を進めた。



はっきり残るひもの結び目



池状の落ち込みの斜面には、土のうが積み上げられ、ワラのような植物繊維で覆われていました

発見された「土のう」。表面には、ワラのような植物繊維がよく残っていました。現代の工事現場や災害現場でも、積み上げや締め固めが容易な土のうがよく使われます。こうした技術の源流が古墳時代にさかのぼることを示す重要な発見です。

釣山

釣山の山裾に沿って、各時代の水路が重なりあいながら流れています (写真左方向が北)



盛土遺構は、有力者のお墓の可能性もありますが、棺などの埋葬施設が存在しないことから断定はできません。しかし、これだけ大規模な溝と盛土を築くには、大変多くの労働力が必要であり、当時の人々にとって大きな意味のあるものだったのでしょう。



幅 5m、深さ 1m ほどの大きさと、大人 4人が並んでも余裕があります



堰は、水の流れをせき止めて水位をあげ、周囲の水田に水を引き入れるためのものです

弥生時代中期以降、同じような場所に水路がつくられ続けているのは、水の管理が周辺地域の人々の生活に欠かせないものだったことを示します。特に古墳時代前期の水路は、木製構造物とあわせて、高度な技術を用いた大規模な土木工事でした。この水路は、本高周辺の開発に関わる重要なもので、この地域の大動脈とも言えるものだったと考えています。

結集された労働力

長大な水路の掘削や、盛土など、大規模な土木工事には、多くの人手が必要で、大規模な労働力を提供したに違いはない。弥生時代から古墳時代という大きな歴史の転換期におけるこの大規模な工事から、人々を束ねあげ、指揮をとるリーダーの姿が浮かび上がる。